

皆さん、こんにちは。それでは、今日学ばせていただきます箇所を、ご一緒に拝読させていただきます。十一頁の「弥陀仏本願念仏」から十二頁の「難中之難無過斯」までですね。ゆっくり拝読致しますので、どうぞ、声をお出しくださって宜しくお願い致します。

弥陀仏本願念仏 邪見憍慢悪衆生

阿弥陀仏の本願を信じて称える念仏は、
自分の考えに閉ざされて、おごり高ぶり、
あなどって仏に背く人たちが、

信樂受持甚以難 難中之難無過斯

信心に目覚めて生きるとはとても困難です。
難い中でも、これ以上難いものはありません。

どうも有難うございました。正信偈講座も回を重ねて参りまして、前半部分の最後になったわけでございます。一回一回の綴りが本当に大事な意味を持っているのだなということを改めて教えられることであります。

いつものように恐縮ですが、感じたことを申し上げたいと思います。あつという間に九月になりました。これは七月十四日の新聞に掲載されていたものですが、中国の劉 暁波（リュウ ギョウハ）さんが、七月の十三日に癌で亡くなられました。中国の人権の自由という民主化運動をなさった方で、ノーベル平和賞も受賞したのですけれども。繋がれて受賞には行けなかったということがありました。

この方の言葉で、「私には敵はいない」という言葉があります。これは大変な言葉ですね。弾圧されるような中であって、しかもなお民主化の運動をされて、「私には敵はいない」。人間の怨みや暴力を乗り越えながら民主化を目指そうとされた。そしてその非暴力を貫いたと。これはもう大変な大事な括目すべきお仕事だと思います。

新聞ではこのような論評がしてありました。

力で異論を封じ込めてきた共産党政権にとって、非暴力の立場を貫き、国、内外から尊敬を重ねる劉氏の存在程、怖いものはない

と、党の事情に詳しい中国のメディア関係者が語られているという。そういうことの紹介がありました。この劉 暁波さんのことを聞きますと、インドのガンディーのことを思い起こすわけです。ガンディーも非暴力ということで、大変大きなお仕事をなさいました。平和ということは暴力によっては解決しない。怨みは怨みを呼んでいくということでもあります。

法然上人が出家なさる時に、法然上人のお父さんが、地方で役職をしておられたのですが、殺されるということがあって。相手を殺したのでは怨みが怨みを連鎖するというので、法然上人は怨恨を晴らすということではなくて、比叡山に登られたということがあるのです。

今の地球世界のことを考えますと中々非暴力ということ一つが容易ではない状況にあります。大事な提言があっても聞こうとしない。耳を持たないということは大変悲しいことであると思いません。

それからもう一つは八月二十六日の新聞だったのですが、華道の池坊専好さんという方が取材をされておりまして、

花も人も命は一瞬一瞬

という言葉をおっしゃっておられました。そうであると思いますね。そのことを忘れてしまうわけでございます。池坊さんのモットーは何ですかと言われて、今を生きるということであるということと言われて、私が注目しましたのは、池坊専応さんという方の

枯れた花にも華がある

普通は、枯れた花は枯れた花で、どうしようかということになるのでありましようが、さすがに華道ですね。

ちなみにこの池坊さんは京都の六角堂のある場所にあります。六角堂というと、親鸞聖人が法然上人に会う前に、百日間、参籠されたということが伝えられておる。そういう由来のことは新聞には出ていませんがね。成る程など、私は感じたのでありますが。枯れた花の花は植物としての花でしょうね。後の華は本当に花が花として咲いている花のはたらきでしょう。花が枯れても枯れない。

これは花だけの話ではなくて、人間もそうだといいことですね。人間も歳を取ったら普通は役に立たなくなるということで、邪魔者扱いされたり、事によったら自分は駄目だと悲観したり、劣等感を持ったりするということがないわけではありません。歳を取っていよいよ人間として光ってくる。味が出てくる。新味が出てくるというようなことを、見事に語っておる言葉であります。

こういうことは親鸞聖人の教えにはもう既に表現されておるのでありますけれども。こういう華道の中で聞かせていただくと、大変有難いということをおもひまして、今日初めに紹介させていただいた次第であります。

それから、今日のところに入りますけれども、

弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生、信楽を受持すること、はなはだもって難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし。
(真宗聖典 二〇五頁)

まず「正信偈」は、依経段、依釈段という二段に分かれておるわけでございます。

総讚（帰敬）というのは、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」のこの一行二句ですね。

依経段というのは、『大無量寿経』に依って、この阿弥陀の徳を讚えるということです。依経段は、「法蔵菩薩因位時」からずっと進みまして、八頁の「成等覚證大涅槃 必至滅度願成就」。ここまです。阿弥陀の徳を讚える最後には、本願の名号は正定の業なり。至心信楽の願を因とす。等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なりという。すべての衆生が、本願の名号をいただいて、真実の信心が起こされ、等覚を成って、大涅槃を証するという道において、必ず、迷いのない目覚めの世界に至るということをお説きおられる。

そして「如来所以興出世」から釈迦章になるわけです。初めに「如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁悪時群生海」。これはもう釈迦章の全体を讚えておるわけです。釈迦如来が、世に出られて、ただこのこと一つ、弥陀の本願海を説くということにおいて、五濁悪時群生海がまさに如来如実のみことを信ずることができるという、そういう大いなる仏道が開かれた。

それを受けて、「能発一念喜愛心」。よく一念喜愛の心を発すればという。この一念喜愛の心とい

うのは、一念の眞実信心が発ると、それにおいてどういうふうな利益、はたらきを得るか。これも大変ダイナミックですね。「不断煩惱得涅槃」。煩惱を断ぜずして涅槃を得るなりという。こういう大きなはたらきであると。

私たちの日常生活は煩惱だらけであります。それこそ暇なく煩惱が起こるとというのが現実であろうと思いますけれども。その煩惱が念仏に遇い、信心が発ると、涅槃の証りを得るという道に至るといふ。煩惱が決して無駄じゃなくして、煩惱が目覚めの大事な縁となる。人間がいかに古から煩惱に悩み続けてきたかという。そこに開かれておる道であるということが言えるかと思ひますね。

次は「凡聖逆謗齊廻入 如衆水入海一味」。これは凡人も聖人も五逆の者も謗法の者も同じく信心を獲て、目覚めて、海に入りて一味なるがごとしという、平等の証りを得ると。これも本当に差別してやまない人間の上に、平等なる目覚めの世界が開かれる。

それから三番目はですね、「摂取心光常照護 已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆眞実信心 天 譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇」。ここでは九頁のですね、「摂取心光常照護」。摂取というのは摂め取って捨てない。阿弥陀の光に遇ってそれが信心の光として、常に我が身を照らしたもうという。それは煩惱の闇があつても、貪愛瞋憎の雲霧があつても、差し支えないと。雲霧の下は明らかにして暗きことなきがごとしという。これも人間の現実の生活というものを、根底から明らかにして下さるようなそういう大きな徳ですね。

それから「獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣」。これは信を獲て見て敬い大きに慶喜すれば、即ち横に五惡趣を超截すると。五惡趣は広げて言えば六道であつて、人間の迷いの在り方を根本から超截する。迷いに振り回されない。迷いに留まらない。往生浄土の人生というものが開かれてくる。必ず仏となるという人生が開かれる。そういうことが歌われております。

その次に「一切善惡凡夫人 聞信如来弘誓願 仏言広大勝解者 是人名分陀利華」。これは一切善惡の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、仏、広大勝解の者と言へり。この人を分陀利華と名づくという。本願念仏の仏道に遇うものはですね、広大勝解の人と言われる。分陀利華。白蓮華と名づく。諸仏が称賛してやまない。そういう徳がですね、讃えられておる。

そして今日の弥陀仏の本願念仏は邪見憍慢の惡衆生というこの弥陀章を結ぶ二句になるわけでございます。

〈補足〉

総讚		歸命無量寿如来
依経段	弥陀章	法蔵菩薩因位時
	釈迦章	如来所以興出世
	結誠	弥陀仏本願念仏
依釈段	総讚	印度西天之論家
	龍樹章	釈迦如来楞伽山
	天親章	天親菩薩造論説
	曇鸞章	本師曇鸞梁天子
	道綽章	道綽決聖道難証
	善導章	善導独明仏正意
	源信章	源信広開一代教
	源空章	本師源空明仏教
	結勸	弘経大士宗師等

「正信偈」を私たちが毎日いただいていくということが、どれ程大きな意味があるかわからない。「正信偈」の初めの総讚。総じて讚える。讚というのは讚嘆。讚嘆ということは口ばかりの讚嘆ではありません。身心ともにですね。身に至り心に通るという。浄土真宗の教えで注目すべき一つの点は、身心です。身と心です。これは絶対に離せません。心だけならばね、何でも言えるのですよ。悪を断てば善が貰えると。言葉だけならね。理想としてならね、言える。しかし、人間の生身の身体、心を持っている事実から言えば、悪を断つということ自身が容易でない。善を行なうということ自身が容易でない。そこに本当にリアリティですね。生身の人間という。生身の人間存在というのは誰のことかと言うと、十方衆生であって、私自身であると。だから浄土真宗の教えに会うことにおいて現実の我が身自身の事実に戻らせていただくということがあるわけです。

人間は理想を言うのが好きでありまして、風呂敷を広げるのが好きですけども。現実の事実ですね。生身の事実に戻ります。これは生きている限り絶対に忘れることはできません。何故かならば、人間のいのちは無常のいのちであり、明日知れぬ人生であると。そして人間苦に満ちた人生であるということがはっきりしているわけですから、やはりそれに応える。その事実がいかにも本当に生きられるか。また死んでいくことができるか。生死を尽くすという、そういうことが、願われておるのであります。

それで今日の一段はですね、親鸞聖人は『大無量寿経』の流通分の最後のほうで、仏陀釈尊のおおせによって、この歌を歌われていると。『真宗聖典』をお持ちの方は、八七頁ですね。『無量寿経』の流通分と申しまして、これは教えをいただいていく点で経典にはこういう見出しはないのですが。中国の道安という方が、経典を見ていく上でこういう展開があるのではないかと。

序分というのはその経典が説き出される由来ですね。それから正宗分というのは何を説いているとかというその本分。流通分は、その経典の中の大事なこと、肝心要のことを十方世界、末代まで伝えずはおかないという。そういうことが流通分として説かれておるということであります。

『無量寿経』の流通分の中にですね、

それ衆生ありてこの経に値う者は、意の所願に随いてみな得度すべし。」仏、弥勒に語りたまわく、「如来の興世、値い難く見たてまつり難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇い、法を聞いて能く行ずること、これまた難しとす。もしこの経を聞いて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし。

(真宗聖典 八七頁)

弥勒というのは未来仏ということで、未来に託されておるわけですね。これは如来の興世に釈尊が仏陀として誕生された、世に出られたということなのですが。私たちから言えば、仏法に出遇うという、まさに仏様の教えに出遇うということは、これは値い難く見たてまつり難しという。難値難見。難値難見ということがテーマとして出されることがありますが。値というのは、値遇い難く、見たてまつり難しという。値というのは本当に尊いものに、価値という値という。現代人は経済的な価値とかね、そういうもので考えてしまうのですが。

如来様が世に出興してくださる。どこに出興するか、私の前です。値い難いということですね、如来の興世から諸仏の経道。諸仏とは、釈迦の教えを同じく感応して、共に生きる諸仏ですね。その教えをいただいて菩薩として人間世界に慈悲に達して生きると。その教えにあつて、私たちに具体的に善知識として表れてくださる。

親鸞聖人から言えば、法然上人ですね。正しく善知識として出遇うことができたという。善知識として出遇うことができたことにおいて、この如来の出世の本意を本当にいただくことができる。

だから具体的にはよき人のおおせに会うということがいかに困難であるかという。もうその通りであると思うのです。中々私たちの人生においてよき人のおおせに会うということは難中の難であるということですね。

そして釈尊が、この経を聞いて信樂を受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなしと説かれたのです。この言葉が『正信偈』の中に歌われているということがよくわかると思います。釈尊ご自身がですね、いかに真実の教えに会うということは、いかに難しいかということ、諸仏の教えに会い、菩薩の法に会い、善知識に会うことはいかに困難であるか。

これはですね、親鸞聖人の師匠の法然上人から言えば、智慧第一の法然坊と言われた方が、四十歳を過ぎてやっとね、中国の善導大師の言葉に触れて、本願に会うわけです。親鸞聖人という方は、常識的に言えば頭脳も仕様も優れた尊い方ですが、二十九歳にして、やっと会うという。そこには、会い難くして会うという。そこには私は人間存在の抱えておる問題が、いかに重く深いか。そういうことを、表わしていると思います。

頭が良いからすぐわかるとかね、そんな程度の問題じゃなくして、人間自身が抱えておる問題がいかに一筋縄ではいかない。深重の、深く重い。また煩惱熾盛ということが。煩惱が燃え盛る。理想的な考えを立てるならば、マイナスと思われるような煩惱がいっぱいあるのか、正しいことをしようと思っても、間違っただい悪いことをしようとしてしまうとか。そういう認めたくない、マイナスと思われるような人間中心の考え方から言えば、そういうものを全部、一切、もう根底から抱えて、この身の救いと言われるわけです。

綺麗事ではないのですよ。この身というところには、極悪底下と言われるような、極悪という刑法を犯したというそういう犯罪ということでしか捉えられませんが、そうじゃない。人間が生きておるといことはよくよく見れば、極悪底下の罪人であると言わざるをえない。そういう存在だということが、生きるところにおいてははっきりする。

そして極悪底下の身にまで響く法であるがゆえに、問題を抱えた存在が、尊いと。大事であるということを知らされると。そこに本当に豊かな人生が展開する。いわゆる倫理的な教えじゃありません。倫理が間に合わないというか。どうにもならないというか。そういう生身の人間存在それ自身が、本当に目覚めて救われていく。そういう存在ですね。

仏陀釈尊が、値い難いということの中で如来の興世に会う。諸仏の経道に会う。菩薩の勝法、教えに会う。それから善知識に会うことはいかに難しいかということ、これを聞いて信樂受持すること、難中の難である。これに過ぎて難きことなしとおっしゃっているということは、その難中の難、難きが中にもなお

難いと。難きが中に仏道に会うという。難中の難、難きが中になお難しというふうな実感はですね、出遇った人の実感です。出遇っていない人には難きが中になお難しという実感はないと思います。そこはね、中々面白いというか。微妙なところでね。

概ね私は学んだわけで、証ったとかわかったとか、殊によっては煩惱が少なくなったとかね。そういうふうな人間性の自分の計らい、力、努力を肯定するような生き方でしか言わないわけでございますけれども。人間の考えで計れるくらいの人間存在の幅の広さ、深さではない。人間存在自身が量り知れないほどの深さ、広さ、重さを持っておると。人間存在の幅は人間が考えている以上に広いわけですね。そして深いわけですね。重いわけですね。そのことがよくよくわからない。我が心。自力の心で、行ったから良いというふうなことに留まってしまふ。そこには自己中心ということがどうしても出てくるわけですが、

釈尊は『無量寿経』の下巻の諸仏を讃える歌の中で、

というふうに歌っております。僣慢というのはおごり高ぶりですね。弊というのは覆うということです。自分の考え、自分の感じ、そういうもので覆われるのです。懈怠というのは怠けるということです。怠けるというのは表面的には仮に一生懸命努力をしていますが、その考えが自己肯定の考えに留まっているならば、懈怠です。ただ怠けているだけが懈怠じゃないです。自分の考えにあぐらをかく。これは懈怠ですね。非常に現代に生きる人間の問題の本質にある問題を、えぐり出しているわけです。

僣慢ということも人間は得意であります。一生懸命やって人と比較して、ちょっとでも偉ければ競争になるわけでしょう。それで世に出るか出ないかということが出てきますね。弊ということも覆われるわけです。自分の考え、見方、そういうものに覆われる。もう何重にも自分が、閉ざされているという。それを含めてですね、ここでは邪見僣慢ということでは言われているわけですね。

邪見ということは、これは良い意味では言われません。邪見は、邪まな見解、見方ということでもあります。私たちの人間関係の中でも、悪いことをするとあの人は邪見の人だということでは言われるわけです。

仏法では、因果の道理。原因結果の自然の道理を無視する。自分に都合の良いものを取る。人間はある意味ではそういうことに齷齪（あくせく）しているような存在だと思いますね。まあ他人の上前を撥ねるといってもありますしね。人様がやったことをあたかも自分のもののようにしてやるということもありますし。色々あるわけですが。まあ知識的にも道德の上からも、そういう自分中心の在り方ということを強行していくという。そういう邪見。

因果の道理を無視する見方というのは、やはり出来るだけ手っ取り早く良いものを得たいというような考え方が人間の中には強烈でして。それがあから人様の誘惑に乗りやすいと。騙されやすいと。原因は騙すほうも問題ですけれども、騙される方にもあると。まあ本質的にはですね、自分を頼みとして如来の本願を疑うと。これが邪見の本質ですね。そこには自是他非という。自分が是であり、良しとし、他を非とする。自是他非という考え方は、私たちの中で強烈であります。自是他非に変わっておる限りは、本願を信ずるといふことにならないと。やっぱり自分を頼むということになる。それにおいて他を批判するということになり己を良しとする。

この邪見を大事な問題として、親鸞聖人ははっきりしておられますが、化身土巻の三五二頁ですね。釈尊の『涅槃経』の言葉を引かれているのですが、三行目からちょっと読んでみますと

『涅槃経』（迦葉品）に言わく、経の中に説くがごとし、「一切梵行の因は善知識なり。一切梵行の因、無量なりといえども、善知識を説けばすなわちすでに撰尽しぬ。」

(真宗聖典 三五二頁)

これは親鸞聖人の言葉で言えば、法然上人を通して本願の教えに遇わなければ、自分は一生を空しく過ごしたであろうと。だからよき人に遇う、善知識に遇うということはいかに大きな意味を持っておるかということですね。

その次の

一切悪行は邪見なり。一切悪行の因、無量なりといえども、もし邪見を説けばすなわちすでに撰尽しぬ。あるいは説かく、阿耨多羅三藐三菩提は信心を因とす。(同)

一切悪行。人間を迷わし、自分を駄目にし、他を駄目にするそういう邪見であるという。邪見を説けば、悪行の因ということはそこに摂まると。人間を迷わせ、自分自身を迷わせ他を迷わせる。限りなくも迷わせていく。それは邪見を説けばそこに摂まると。あるいはとにかく阿耨多羅三藐三菩提は、これは無上正等菩提だと。信心を因とすと。これも信心が目覚めの因であるということをして仏陀釈尊の言葉として『教行信証』の中に引かれておるわけです。私たちにおいて邪見というものがいかに深いか。邪見の虜になっておるのが我が身であるということに気が付かないということがございます。

憍慢ということは、おごり高ぶることですね。自分のことを誇るという。これは憍慢の憍。他と比較して起こるといふ。慢。これも自力に捉われる言葉であって、私たちの中に非常に深い。邪見憍慢ということを一言で言えば、これは宮城顕先生が言われている言葉ですけれども、私たち自身が、念じられていることを知らない。量り知れない人々に念じられておる。自分中心じゃない。例えて言えば、親から友だちから先生から。ありとあらゆる人々から。どうぞ本当に生きてくださいということが念じられておる。念じられておるということを知らないということは、我が思いだけで、自力の計らいですね。我が身、我が心、我が力、我が様々な善根をたのんで、己が良しと思う。これが邪見なのですね。邪見が邪見として自覚されれば、大したものですよ。

あまりこういうことはどうかと思われるかわかりませんが、北朝鮮の問題は非常に地球を震撼させている。東京の上を通るかもわからないということまで言われておるわけで。その根っこにあるものは、邪見ではないでしょうか。己の国が絶対であるという。核というような競争社会の中で、絶対に負けないのだと。

いつかテレビでね、顔を噛み切っても負けないのだと。生々しい表現がありまして、それを聞いてね、僕は震撼しましたね。太平洋戦争中、大東亜戦争中の日本人のことをね、毛唐には負けないのだという。だから歴史というのは繰り返すという。繰り返していく中で歴史に学ぶということがいかに困難であるかという。邪見というところには聞いたり、学んだりということが欠けているのではないですか。己の主張、自我の正当を、自是他非という。そういうことがよくよく強烈にあると思いますね。

弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生という時には、罪惡を犯すということもありますけれども、己を良しとして生きて、そこに罪惡の自覚のない者をですね、信樂受持すること甚だ以て難しと。それを信じ喜び受持するということは、心にも身にもいただいてですね、生きるということは甚だ以て難いと。難中の難、これに過ぎたるはなしという。本願念仏の仏法に出遇って、目覚めていくということは、まことに難中の難であると。難中の難である、これに過ぎたる難はないということにおいて出遇ったものにおいてはこれに過ぎたる喜びはない。これに過ぎたる幸せはない。そういう難中の難ということにおいて出遇いの深い喜びが表現されておる。

決して、遇い易くてね、道は十方衆生に開かれているのですけれども、開かれているものに本当に遇うということはこの身、この心に本当にいただくと。阿弥陀の光、本願に照らされて、この身がいかに邪見憍慢の悪衆生であり、如来に悲しまれておる存在であるかということに気付かされて出遇うということであると。本当に内容の意味の深いところでもあります。

例えば思い出すのでありますが、岐阜の高山の出身であります、明治時代になりますけれども、中村久子さんという方が、幼いときに突発性のダストで両手両足が途中から切断されてですね、ダルマ娘と呼ばれて、散々な苦勞をして生きられた。本願の教えに出遇って、本当に生きる喜びを見出していかれた方ですけれども。中村さんの言葉の中に、

手足があることが当たり前だと思ふ心。手足のあることが有難いと思わない心。それが本当に遇

うことを拒んでいるのだ

というふうなね。手足が揃ってはたらいっているということがいかに希有な。あることの難い恵まれた尊いいのちをいただいているかということに気が付いていくと。まあ中村さんの歌の中で今思い出しますけれども、

手足なき 身にしあれども 生かさるる 今のいのちは 尊かりけり

手足のない身であるけれども、生かされている、今、現に生きておるこのいのちはまことに尊いものである。手足のない身であるけれども、生かされているいのちは尊いということを歌われておるわけです。

私たちはいかに日常性の中に埋没して、尊いいのちをいただきながらそのことに気付かずに、邪見憍慢とも知らずに生きておるかということを知らされた。邪見憍慢の悪衆生というそういう自覚を与えられるということは、並大抵のことではないと教えられることでございます。

十分ではありませんが、今日のところは一応これまでにさせていただいて、座談の時間が大事であると思いますので、話の方はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。